



# 近江の金銅仏

滋賀県立近代美術館

主査 高梨純次

仏像は、様々な素材で造られてきました。日本では、特に平安時代以降、圧倒的に木彫がその素材として選ばれることとなりますが、日本に現存する像で最も古いとされている飛鳥寺の釈迦如来坐像、あるいは法隆寺金堂の釈迦三尊像などは、銅造であり、また飛鳥時代から白鳳時代にかけて造られた法隆寺献納小金銅仏なども金銅仏です。前近代の像として最大の奈良の大仏、また鎌倉時代に造られた鎌倉大仏も、言うまでもなく金銅仏の代表的な作例です。この鎌倉大仏を例に出すまでもなく、木彫が圧倒的に多い日本の彫刻の中にあっても、金銅仏については、全ての時代を通して造られ続けてきたのです。

しかし、奈良時代頃までの銅像と、中世以降の銅像では、いくつかの違った要素が認められます。その作風や構造―造り方―は、木彫との関係もあって時代による変遷が大きいので、具体的な作例に従って述べてゆくことにしますが、最初に成分についてだけ確認しておきます。

銅像は、一般に型を造り、そこに溶かした銅を流し込むことによって造られますが、奈良時代以前については、ロウ型を使うことも多く、中世には土型が用いられ、また外型となかご中型を造ってその間に銅を流し込み、像内は木彫の内うちご削りのように空洞となるものもあります。像内を空洞としないものは、ムクと呼んでいます。そして、でき上がった銅像の上を金色にするため、水銀を用いて金を焼き付けてゆきます。これをとん鍍金と呼びますが、一種の金メッキとご理解ください。

ところで、銅像を造るに際して、「純銅」と

いう言葉はあまり聞きませんが、このような「純銅」で造られることはなく、いくつかの不純物を含むこととなります。錫や鉛が多いのですが、造像に当たっては鉛が多い方が造りやすいとも言われています。この銅とそれ以外の金属との比率が、時代によって異なることが知られています。奈良薬師寺金堂の薬師三尊像は、平城遷都に伴って寺地が移動し、それに伴って像も移動したのか、それとも造り直されたのかという論争が戦わされ、基本的に結論が出ていませんが、いずれにしても7世紀末か8世紀前半に造られた、日本では屈指の優れた銅像です。薬師寺像の銅の含有率は、脅威的なことに95%を前後する数値を示し、ひそ砒素・錫・鉛ともに0.3—1.3%に抑えられています。つまり、先程の用語に従えば、限りなく「純銅」に近いということになります。対して、与謝野晶子の歌でも知られる鎌倉大仏は、銅の含有率68%、錫10%、鉛に至っては20%に近いと報告されています。

古代の金銅仏においては、銅の含有率が極めて高いという報告は、法隆寺献納小金銅仏の科学的調査の結果からも明らかにされています。銅の含有率が高いということは、一面において鑄造が難しいということになりますが、古代の小金銅仏のレントゲン写真を見れば、ムクの像の場合に顕著ですが、極めて気泡す―鬆―が多いことに気がきます。つまり、鎌倉大仏において、銅の含有率が低く鉛の含有率が增大するということは、銅像の制作に関わる技術革新ということになるのです。

このような予備知識をもって、近江の金銅仏を、基本的に時代をおって眺めてゆくこと

にします。

制作が7世紀に遡ると考えられる像が、野洲町の報恩寺に伝わる観音菩薩立像（像高28.5cm）です。法隆寺献納小金銅仏のうち176号像と近い形の裳や瓔珞を表す点などが注目されている優作です。八日市市の慈眼寺に伝わる観音菩薩立像（像高32.5cm）も、7世紀から8世紀の初頭にかけて制作された金銅仏で、報恩寺像に比べるとやや硬化した表現になりますが、堅実な作風になる優作です。慈眼寺像は、特に太いより紐状の瓔珞をつけるユニークな形式を持っていますが、ほぼ同じ形式になり顔の表情や背面の表し方までほとんど同じ作例が福島県の福聚寺に伝えられています。両者は、基本的に作者を同じくするものと考えられますが、この種的小金銅仏の場合、このように極めて近い姿で表される例も多く、作者の系譜などを考えるに際して、注目されるどころです。報恩寺像、慈眼寺像ともに30cmを前後する立像ですが、台座を含めた全身を一鑄で造っています。



薬師如来立像(大津市聖衆来迎寺)



菩薩半跏思惟像(愛東町百濟寺)

この頃の作とされる像は、他に湖東三山のひとつ愛東町百濟寺に伝わる菩薩半跏思惟像（像高23.4cm）があります。これは、左足を踏み下げた形の坐像で、右肘を右膝にのせて立て、首をやや右に傾けて右指をそれにあてがうという、菩薩が考えているスタイルを表したものです。京都広隆寺の弥勒菩薩像を代表例として、7世紀を中心とする時期に、朝鮮半島の影響を受けて日本列島でも流行を見た形式です。百濟寺像は、後世に火災を受けていることも災いしていますが、鑄上がりが悪く、随所に別鑄して鑄かけた後があり、鑄造技術の未熟さを見せています。

なお、純粹の金銅仏ということにはなりません。金属製の仏像一というよりは堂内の荘厳具一として、大津京にかかわる大津市の穴太廃寺より出土した銀製の押出仏も、類例の少ない貴重なものです。

8世紀、すなわち奈良時代に造られた金銅仏としては、石山寺の釈迦如来坐像・菩薩立像、聖衆来迎寺の薬師如来立像、善水寺の誕生仏像など、作例が増加してきます。

石山寺の釈迦如来坐像（像高14.0cm）は、柔軟な感覚になる簡略な表現の像ですが、裳懸座までを一鑄とする、比較的類例の乏しい像です。その形式などは古様で、白鳳時代の作ともされますが、形式化が著しく実際の制作は奈良時代に入るとするのが妥当かと考えます。同じく石山寺に伝わる菩薩立像（全高56.3cm）は、現状では頭部を失うもののこの種の像としては大きく、まことに本格的な作例です。頭部の写真も残されており、それによると白鳳仏を思わせる表情も認められますが、長身で、臂釧や腹部の花文、腰帯の瓔珞を付した装飾的な表現、両脚部の規則的に繰り返す衣文表現など、新しいスタイルを表すものと解せます。脚部の衣文表現には、奈良末期から平安初期の木彫に通じる点も認められ、将来的には、奈良から平安時代にかけての彫刻史、あるいはより広く東アジア全体

の中で検討される必要があります。聖衆来迎寺の薬師如来立像(像高42.3cm)は、全身がムクの像で、右手で衣の端を握ったユニークな姿に表されています。この種の姿となる像には、岐阜県横蔵寺の薬師如来立像、京都地蔵院の如来立像があり、木彫では大津市若王寺の如来立像があります。横蔵寺像や地蔵院像が平安初期に顕著となる衣文表現を用いるのに対して、聖衆来迎寺像は衣文の流れも自然で、前代の柔軟な感覚が支配しており、この一連の像のプロトタイプと理解することができます。

甲西町善水寺の誕生仏像(像高23.2cm)は、奈良時代も末期における誕生仏像一誕生仏とは、釈迦が生まれた時に「天上天下唯我独尊」と獅子吼した姿を表したもの一として、特に大仏開眼にかかわる東大寺の誕生仏像に極めて近い本格的な像として注目されます。善水寺像は像高が東大寺の半分に近い小像ですが、全身をムクの一鑄とし、約3kg程の重さがあります。顔の肉取りや胸・腕の表現などには重量感を増し、正面で打ち合わせる裳の表現も大振りになるもので、平安初期彫刻へと移行する姿があります。なお、誕生仏像の遺例を県内で求めるならば、守山市大光寺像(像高9.6cm)、甲賀町阿弥陀寺像(像高10.6cm)が奈良時代の作として知られ、中世に下るかと考えられる像が甲西町南勝寺(像高18.2cm)などに伝えられています。

ところで、鎌倉時代に至ると、古像の模作が行われます。最もよく知られている種類のものとしては、信州善光寺の本尊で、聖徳太子と関係すると伝えられる古式の阿弥陀三尊像が善光寺式阿弥陀三尊と呼ばれてよく模作されることとなります。県内では、甲西町善水寺に阿弥陀如来立像(像高31.7cm)のみが伝えられており、背面の刻銘によって元久3年(1206)善金を願主として万アミタ(の)という鑄師が制作したことが判明します。善水寺像

は、作風からしても鎌倉時代の特色が顕著ですが、湖北町小谷寺菩薩半跏思惟像(像高22.8cm)は、7世紀の像の作風になるもので極めて古様なスタイルになります。しかし、木製の台座の銘文に、文明12年(1480)の年記があり、15世紀の模作と解釈されています。

このように、作風や銘文から中世に至っての作であることがわかる場合は明快ですが、その判別が極めてむづかしい像も残されています。例として、ここでは大津市真光寺の観音菩薩立像(像高27.3cm)と高島町長谷寺の観音菩薩立像(総高18.5cm)をあげておきます。いずれも7-8世紀頃のスタイルによる像ですが、わずかに新しい要素も認められ、中世に至っての模作と考えられています。金銅仏には、このような中世の模作はもとより、後世の偽物もまま認められ、レントゲン撮影などによる科学的調査も取り入れられ、研究が続けられているのです。

話を時系列に戻しますが、平安時代の近江の金銅仏として、園城寺(三井寺)に伝わる3体の優れた像をあげておきましょう。釈迦如来坐像(像高34.5cm)は、穏やかな表現になる平安後期特有の作風になるもので、12世紀の作と考えられます。右肩以下と、左手首以下を別鑄とし、頭から体の中心は、前後に型を作って合わせ、また両脚もひとつの型で体の型に組み込むようにして鑄上げるといった造り方になっています。これは、明らかに当時の木彫の寄木造との関連を表すもので、平安時代前期までの全身を一鑄するという方法とは違っています。またこの像は、中空となり、銅の厚みが極めて薄い点にも特徴がありますが、これも当時の木彫における大きな内刳りと関連するものでしょう。

千手観音立像(像高40.5cm)も、頭から体の中心は銅の厚みを薄くして一鑄とし、頭上面を別に造って柄差しとし、両肩以下、そして脇手を前後3列別々に造って鋳で留めると

いう仕様になり、台座も3パーツに別れます。  
 軍荼利明王像（像高18.5cm）は、8本の手を持つ複雑な形の像ですが、頭から体の中心を一鑄とし、左右各4本の手を別に造るほか、各部に鋳が残されており、装身具などを別に造って取り付けていたと推測されます。いずれも平安後期も下がった12世紀後半あたりの作でしょうが、基本的に別鑄して組みあげるという発想で造られています。

このように、平安後期に至ると、金銅仏は著しく木彫の作風や制作法へと近づき、木彫を銅像という素材で造っているという感を呈します。ただし、歳王権現という山岳宗教特有の尊体が銅で造られたり、経塚の埋納品として銅が造られるというように、厳しい自然条件下においても尊体が維持できるという銅の持つ堅牢性がこの種の造像においては尊ばれたのです。園城寺の金銅仏も、この寺が後世の修験道につながる山岳修業を重視した点から、このような金銅仏が集中的に残されているのかもしれませんが。

紙数も尽きてきましたが、最後に鎌倉時代の金銅仏について、2体ほど取り上げておきましょう。

多賀町敏満寺の大日堂に伝わる大日如来坐像（像高13.7cm）は、この地の大きな寺院で



大日如来坐像（多賀町敏満寺大日堂）

あった敏満寺にかかわる優れた金銅仏です。両肩以下を別に造り、八重の蓮華座はそれぞれを別に造って組みあげるという造り方になり、銅の厚みも極めて薄く造られています。敏満寺の

鎌倉初頭における復興には、東大寺の復興に活躍した俊乗坊重源（ちようげん）が関わっていますが、そのせいもあってこの像の制作には奈良仏師の慶派が介在しています。制作は12世紀の末から13世紀の初頭と推測されますが、現存する県内の中世における金銅仏のうち屈指の優作です。なお、敏満寺大日堂には、鎌倉中期の作と推定される毘沙門天立像（像高10.8cm）も伝えられています。

現在、ボストン美術館にある観音菩薩坐像（像高46.0cm）は、光背と台座も具備した優れた像ですが、台座の銘文から、犬上氏（いぬのうえ）や依知秦氏（よちあき）が願主となり、文永6年（1269）に西智が制作したもので、不動明王・毘沙門天像を伴って松尾寺本堂に安置されていたことがわかります。松尾寺とは、湖東三山のひとつ秦荘町金剛輪寺ですが、この像は、全国的に見ても中世における金銅仏の中では屈指の作例で、近江におけるこの時期の金銅仏を考えるに際して、忘れることのできないものです。

近江の金銅仏の研究については、なお考えるべき課題も多く残されていますが、このように一瞥しただけでも、各時代に優れた像が伝えられていることがお分かり頂けたでしょう。

#### 【参考文献】

久野健 編 『仏像集成4 日本の仏像〈滋賀〉』1987年 学生社

松原三郎・田辺三郎助『小金銅仏』1979年 東京美術

東京国立博物館『金銅仏』 1988年

〔備考〕 写真は、滋賀県立琵琶湖文化館、および寿福滋氏撮影のものを多賀町教育委員会より提供を受けました。

#### 滋賀文化財教室シリーズ No.142号

発行年月日 1994年2月1日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525